

社会科学における学際的調整 ——妥当性検証の必要性——

ムザファー・シェリフ* キャロリン・シェリフ**

この論文の命題は、心理学や社会学等の社会科学が、他学問からの相互借り入れなしには広がりや深さのある有効な発展をなしえないということである。学際的な借り入れは、選択の問題ではなく、各専門で必要とされる広がりや深みを得る上に必然的なものである。自然科学は、その発展途上でこのような相互借り入れを何気なく行ってきたし、心理学も特に知覚過程の事例について、そうであった。相互借り入れをめぐる論争が起こるのは、社会科学の未成熟な自己優越感によるのであり、それは不毛の議論である。専門を横断する科学的なプロジェクトや、少年非行のようなさし迫った実際問題に取組む企画が失敗するのは、これらの仕事への応用を誤解し、間違ったからである。学際的な借り入れを行ない、現実的な仮説を横断的に妥当させ一般化を図るといった有効な応用を行なうために、主として、何をすべきか、またすべきでないかが、特に最後の章で要約的に述べられている。

Interdisciplinary Coordination in the Social Sciences needed: validity checks

Muzafer SHERIF* Carolyn SHERIF**

The thesis of this paper is that any single one of the social "sciences", psychology and sociology and the rest, cannot validly develop in scope and depth without cross-borrowing from each other. The interdisciplinary borrowing is not a matter of choice, but a necessity towards achieving the needed scope and depth within each discipline. The physical sciences have been practicing such cross-borrowing in their development without a fuse; so has psychology, especially in the case of sensory processes. It is the immature ethnocentrism of social disciplines that is responsible for the debate about cross-borrowing, which is a futile controversy. The failures of cross-disciplinary scientific projects and enterprises for grappling with urgent practical matters (like juvenile delinquency) are due to the ill-conceived and incorrect applications of these undertakings. The major Do's and Don'ts for the effective application of interdisciplinary borrowing and cross-validation of realistic hypotheses, and generalizations are presented in a capsule form in a special section at the end.

この論文の命題を最初に、簡潔に述べておこう。
(1)社会科学における学際的研究で、意見を交換したり、共同作業を行なったりする傾向は、もはや元に戻れないほどの所にまできている。その理由はこの論文のテーマが進むにつれて明らかになるであろう。
(2)学際的企画における多くの不満や実際の困難は、学際的努力がなぜ行なわれるようになったのか、そしてそれらの努力が個々の研究者の優先事項であるだけでなく、それぞれの社会科学の発展にとってなぜ必然的であるのか、といった核心的問題を適切

に処理できないことから生じている。核心的問題の性質については、あとで規定されるであろう。
(3)学際的關係の実体的問題を検討すれば、各個別学問が基本的・基礎的意味において他の学問を必要としていることがわかるであろう。社会心理学の分野では、一方において、社会学的・人類学的著作と、現実の観察者によって報告される事実から問題の公式化の手がかりを引き出し、他方においては、こうして生まれた仮説を試すための研究計画を、適切な実験、紙と鉛筆、フィールド技術などを用いながら、立案する方法が長らく取られてきた。その中には、グループの形成、機能の行使、リーダーシップ、基準グループ、グループ相互間の関係、態度、態度の変容などについてのテーマも含まれていた。学際的な

* ペンシルバニア州立大学教授 (社会学)
Professor, The Pennsylvania State Univ.

** ペンシルバニア州立大学教授 (心理学)
Professor, The Pennsylvania State Univ.
原稿受理 昭和51年6月15日

プロジェクトは特定の問題について行なうべきだとする江守教授の立場（江守、1975年）と同じように、われわれも当初から特定の問題から出発してより広い範囲にわたる意味合いを引き出すことに努めてきた。

社会心理学におけるこのプログラム——学際的調整への集中——については、次の著作の中でさらに詳細に検討することができよう。

- 1) 社会心理学：学際的関係の問題と傾向（1963年）
 - 2) 社会科学における学際的関係（1966年、Carolyn Sherif、共編著）
 - 3) 小グループ研究におけるフィールド作業と研究所の統合（1969年）
 - 4) 基準グループ（1964年、Carolyn Sherifと共同）
- 等7冊が社会心理学シンポジウムの項目により参考文献リストに載っている。

社会科学間の関係の実体的核心に迫ることは、今日われわれを悩ましていた問題を解決できる唯一の方法である。

以下、先ほどリストに挙げた文献の主張をさらに詳しく述べることにしよう。必然的に、それは社会心理学者としての私自身の経験や関心を反映することになる。社会科学における学際的研究について検討するにあたって、私は心理学者として、社会心理学に関連する問題に集中せざるを得ない。しかしこれは自己満足的な選択ではないだろう。社会心理学者は、心理学と社会科学の交差点で仕事をしながら、学際的関係についての問題に特別な関心を寄せている。そうすることで、関連学問のすべての同僚と同じく、学際的社會研究に貢献できる立場に立っているのである。

1930年代に社会心理学の勉強を始めた時、私は当時の多くの人々と同様、人間性、知性、協力と競争、思春期の危機、自我の心理、グループの相互作用における行動などについての心理学の研究とその一般化に学問的優越感を抱いていた。しかし、この優越感は、文化横断的な比較や、他分野の知見参照を行なわなかったがゆえのものであって、その一般化は所詮、自分たちの特殊な道具立てに合わせて著述を行なう心理学者の流行の価値観や基準枠の中でしか、成り立たないものであった。

人類学者と社会学者は心理学におけるこのような優越的な一般化を訂正するのに大きな影響を与えてきたし、今も与えつつけている。優越感ゆえの展望の欠如は、社会心理学の複雑な問題を扱っている心

理学者だけに限ったことではない。立派な教授を擁するような心理学研究所によって信奉される特殊なモデルや公式化も、時として優越感に基づく選択と歪曲の源になり得る。このような場合、研究所は、いかなる欺瞞も意識することなく、ほとんどあらゆるモデルや仮説を証明のために利用し得るからである。かくしてE. G. Boellingはその著「実験心理学の歴史における感覚と知覚」(1942年)の中で、「Wundtの学生は二次元の感情理論を確立したが、他の者は確立しなかった。Wurzlungは心像を決して発見しなかったが、Cornellは発見した。感情は感覚であるのかないのかという疑問に対してどう答えるかは、研究所の雰囲気によってかなり決定された。こうした研究所の雰囲気は親研究所からその子へ広がっていた」(p. 612)と書いた。

同様に実験心理学の歴史において、正統的なゲシュタルトの公式化に好意を持つ心理学者は学習における洞察を最初に発見した。他方、正統的な行動主義による説得を行なう実験主義者は一般法則として試行錯誤を発見した。これらの意味合いについては、あとでもう一度触れることになる。

学際的協力はなぜ必要か——核心的問題

学際的問題の実体的核心に迫る手近な道は、医学、経営学、工学などの応用部門がこれまでほとんど必要を認めなかった社会科学をなぜ求めるようになったのか、尋ねることである。医学は、社会科学が多少とも力添えになると考えるのが滑稽なほど、独自の名声を確立している。医学は急速に発展している物理学と生物学によって支えられているのである。それでは、なぜ多数の医科大学やビジネス学校、技術系の学校などで社会科学とか行動科学のプログラムがとり入れられているのか。

その答は、たとえば、医学は人間を扱うからであり、また解剖学や生理学といえども隔絶した自己充足的な研究テーマではないからである。今日の医学は、高度に専門化しており、社会科学が学生に提供できるものよりはるかに多くの理論と技術を深く修得することを要求している。たとえば、新陳代謝の乱れの測定と処置もそうした問題のひとつである。

ところが予防医学のWilliam Schottstaedtは、新陳代謝病棟の患者の詳しい生化学的・生理学的記録を調べたとき、純生理学的な新陳代謝の測定値の変化が、患者間ならびに看護婦、医師、訪問客との対人関係の推移に大きく関連していることを発見した

(Schottstaedt, et.al. 1958)。

これらの“対人”関係が必ずしも個人的な問題でなかったことは、容易に理解できる。そこには、患者の家族とか財力の問題も含まれていた。これらの特定の患者がなぜ新陳代謝の乱れで入院する羽目になったのかをさらに深く尋ねていけば、われわれはたちまち、人口統計の研究を必要とする問題や病院の入院手続きや財政面の分析を必要とする問題にぶつかるだろう。さらに、それらの問題は、政治的・経済的システムの問題とも結びつくことになるだろう。

特定の科学にとっての学際的関係の核心的問題とは、その公式化の妥当性を裏づけるのに必要なすべての証拠を獲得して自分自身の足でしっかりと立つために、他科学からどのような結果や概念を借用すべきであるのか、またどのような問題において他の学問と相互作用をもつべきかを決定することである。正統的学説の絶対的な力に頼っている、頭隠してしり隠さずのようなもので何にもならない。そうすれば、他の学問との相対的位置づけについても、均衡のとれた見解を得られるであろう。

いかなる科学もそれ自身孤立した島ではありえない。他の学問から何を必要とし、どのような相手と相互関係をもつ必要があるのかを慎重に決定するならば、その学問は自分自身の領域について徹底的な研究を行なうことが可能になる。しかし関連する学問から隔離され、確固とした相対的位置づけを欠いているならば、一つの学問領域の中だけで徹底的な研究を行なうといってもそれは、他の学問によって既に調査済みの領域に苦しまぎれの探検隊を送り出すようなことになる。特定科学にとっての学際的関係の核心的問題というべきものは、サロンでいろいろな話題について優雅に話すというような、手軽に考えられた学際的研究の観念とは、ほど遠いものでなければならない。

[分析水準]いくつかの社会科学がさまざまな分析水準において同じ問題や関連する問題に取り組んでいることを知っておくことは重要である。(Schneirla, 1951年; Scott, 1958年)。これらのさまざまな水準は、それぞれの学問にもっともふさわしいものであり、それぞれに適する概念と結びついている。しかし、いろいろな分析水準を含む学問横断的境界線は、単なる歴史的な仕事の区分を示す横断境界線よりもずっと大きな問題を提起する。なぜならその過程で分析水準を異にしたものはまったく同じになるとは

とても思えないからである。たとえば、生物学的方法は飢えを基礎に置いて分析するものであるが、広くいきわたった生理学的剝奪または空腹感が暴動、社会運動、革命などを引き起すか否かを予測する際の基礎としては、完全に不適切となる。逆に言えば、食糧暴動やそれに結びついた運動を研究するならば、リーダーの中には、あまり飢えてもいない人々がしばしば発見されるのである。

社会心理学の学際的関係と分析水準

社会心理学は、他の社会科学でも話題となっている問題やそれに関連する問題に数多く取り組んでいる。たとえば、グループの相互作用、リーダーと追従者の関係、政治的態度、グループ相互間の関係、集団の相互作用などを挙げるができる。歴史的に見れば、社会心理学は心理学と社会学の双方においてほぼ同時に発展してきた。ある意味では、この双生児的發展は、当時のほとんどの正統的心理学者が、社会的関係における行動の問題に十分な注意を払っていなかったことを反映している。またある意味では、大きな影響力をもつ社会理論家の、個人心理学と集団心理学とは完全に異なる概念と原則が必要であるとする確信を反映していた。たとえばフランスの心理学者 Durkheim は、集団心理学を個人心理学とはまったく別のものと考えていた。George Simpsonによれば(1963年)、「生来的に社会的であるような個人心理学をわれわれがいつか確立できるかもしれない、ということを彼(Durkheim)は予測できなかった」(p. 3)。

あらゆる種類の心理学の分析単位は個人である。その基礎的データは、過去ないしは現在の刺激状況に関連する個人の活動または行動である。科学としての初期の発展の頃から、心理学は学際的であった。一方では感覚のメカニズムを規定するため、他方では刺激の性質を規定するために、心理学は当時の生理学と物理学の双方から多くのものを借用した。正統的な実験心理学では、そうすることが基本的であると長く考えられていた。そして、借用がとりたてて“学際的”であるなどと考えられないほど、習慣として定着した。学際的という言葉は、社会科学との関係に言及する段になると、純粹さの欠如を意味していたのである。正統的な心理学と社会科学との学際的関係についてはこれから解決しなければならないが、この関係が社会心理学にとっての中心の問題になることも明らかである。私が何年も前にした

ように次の問いを発するならば、この問題が基本的に避けたいことがすぐにわかるだろう。すなわち社会心理学において刺激状況とは何か (Sherif, 1936年)。

社会心理学における刺激状況の問題

この疑問に対する包括的解答を試みるならば、社会的刺激は他の個人やグループ内の個人をも含んでいることがわかるであろう。社会的刺激は他のグループ、社会機構、制度、文化の対象、社会規範、言語体系、テクノロジーの対象、価値など、つまり、簡単にいえば、社会学、人類学、政治学、経済学のような社会科学の主題を包含しているのである。

しかしながら、社会科学は個人の分析水準に限定されるものではない。社会科学はいろいろな分析水準において規則性、形態、過程およびそれらの変化と確実に関係している。社会文化的な分析水準は人間のグループ、制度、親族体系、生産分配の体系、文化的価値などを分析単位としている。しかし、そこに含まれる特定の個人の行動が必ずしも分析されるというわけではない。

そこで、疑問が生じる。つまり社会文化的な分析水準の研究は社会心理学とどのような関係をもっているのか。ここで、社会刺激状況をいかに考えるかという点が再び重要になる。

感覚現象に関心を抱く、正統的な心理学では、“刺激”は物理的環境の独立した項目または次元として典型的に考えられていた。しかし数世代にわたる実験作業により、独立した項目や入力として刺激を規定することは十分でないことが明らかになった。心理学的には、特定の刺激の意味は、それを取り巻く他の項目や個人の、過去の経験に依存することがわかった。たとえば、色の視覚についての Harry Nelson の研究 (1964年) は、光が現れる背景の色、照明、その他、関係する要素を基準の枠内で変えることにより、色の感覚が“われわれの望むあらゆるもの”になりうることを示した。Nelson がいうように、単なる一条の光の視覚についても、その背景との関係において研究する必要があるとすれば、この原則を社会的行動の研究に当てはめた場合には、じつに大きな説得力を持つことになる。そして、社会的状況における個人の背景と関係を考察することが重要になる。

社会的状況における個人の行動の背景と関係とは、どのようなものか。たしかに、それは部屋の色とか

照明とか他人の絶対的存在などよりはもっと大きい。それゆえ、社会的状況における行動を理解するため、分析する必要のある要素を列挙して、社会的状況にかかわってくるものを簡単に見ておくことにしよう。

1. 社会的状況に参加している個人に関する要素のセット。これらは次のような要素を含む。
 - a) 人間の数、年齢、性別、教育水準、職業的地位、経済力、社会的地位。
 - b) 宗教、社会的階級、年齢などのいろいろな面についての均質性と異質性。
 - c) 最も重要なこととして、友人、他人、ライバル、上役、下役といった参加している個人間の関係。彼らは一つのグループのメンバーであるのか。それとも、敵対グループのメンバーであるのか。

2. 現在の仕事、関心事、活動などに関する要素のセット。仕事や活動はいつものものか新しいものか。単純なものか複雑なものか。非常に組織立ったものか多数の選択の方法を許すものか。

3. 場所、道具立て、設備などに関する要素のセット。すべての場所は物理的特質と文化的背景の双方を含んでいる。つまり、遊ぶ場所、仕事する場所、愛を交す場所、涙を流す場所——。

4. 上の3つのセット間の関係を要約する要素のセット。たとえば、仕事における個人の熟達度、彼にとっての仕事の重要性、場所に対する活動の適切さ、仕事を行なうための設備の有無などを考慮しなければならぬ。

社会的状況には、どんなに鋭敏な記録器具でも検出し得ない多くのものが含まれている。状況の中にじかに現れている要素や、背景・人間関係として潜在的に含まれている要素が研究に見つけられ、然るべく重視されていたならば、“心理学的実験についての社会心理学”により現在もたらされつつある修正的知見は、かくもいたましいほどに必要とはされなかったであろう。この運動は、ずっと数に入れられなかった要素 (たとえば、態度の変容を研究する場合の、研究状況の“聞きただし役”) に対して研究者の目を開かせるのに役立っている。

前に挙げた要素のセットの中に含まれているかなりの変数は、社会文化的な要素である。たとえば、

物理的道具立てはただの物理的道具立てではなく、厳粛な研究所であり、くつろげる居間でもある。また実験者はただのもう一人の人物のみならず、科学の代表者でもある。人物間の関係は、たとえば医者と患者のように、一般的な地位と役割の関係を反映するものである。

こうして、実験心理学においては、特に、記憶での図式の役割についてのBartlettの実験(1932年)や、判断の相対性についての精神物理学的研究などによるゲシュタルト心理学者の感覚実験の成果を通して、つぎのことが確認された。つまり、刺激状況に対する個人の反応は、分離した別々の要素に対応するだけでなく、それらの関係とパターンにも対応するのである。

ここにこそ、社会心理学者がパターン化した特質と形式により、社会的刺激にかかわらなければならない理由がある。そして、この必要性は、社会生活でのパターン化した行動、出来事、対象などの規則性にかかわってきた社会科学の所へ、また、このような規則性の発展、安定、変化などを研究してきた社会科学の所へ、彼を導くのである。

簡単にいえば、彼は場合に応じて社会学、人類学、政治学あるいは歴史学に依存するようになる。個人の社会的刺激についての過去の歴史と、自分がじかに接する状況と出来事の特徴などを適切に規定するために、彼はこれらの学問の結果に依存するようになるのである。

もちろん、だからといって、彼が社会学者、政治学者、あるいは人類学者になる必要はない。実際、そうなることは彼の目的をくじくに違いない。なぜなら、彼が借用する必要があるものは、社会的現実のいろいろな面を規定する方法なのだから。

現在でも、多くの社会心理学者は、自分の研究にとって重要な社会的変数が研究状況においても反映されるという見解をとりがちである。たとえそれが当たっていたとしても、彼が自分の小規模な実験で社会文化的な変数の反映物を見出すとはいえない。なぜなら、彼らは反映物をさがす用意がないからである。彼らは、すべての社会科学の基礎材料である個人の相互作用を研究していると宣言することにより、このような変数を研究する他の社会科学への関心の欠如を正当化する。

他の社会科学をこのように無視する根底には、個人、グループまたは社会を完全に独立したものであるかのように眺めた過去の文化、哲学の残滓がある。

もちろん、個人がいなければ、グループ、制度、価値、力関係、リーダーシップ、文化といったものもない。しかし、これらの社会科学からわれわれが学べることは、グループ、リーダーと追従者の関係、制度、社会システムなどがそれぞれ独自の性質を持っているということである。ひとたびグループが生まれれば、それらの特質と価値は、個々のメンバーにとって重要な刺激状況となる。

人間は社会機構をつくりだす。しかし、次には社会機構が人間をつくり直すのである。人間は機械をつくる。しかし、次には機械が人間にインパクトを与えるのである。すべての心理学にとって、個人は適切な分析単位である。しかし、他者との相互作用によってもたらされるものは、個人の行動を支配する原則にまったく触れることなく、それ独自の分析水準において研究の主題になるのである。社会学、人類学、経済学あるいは政治学が社会心理学の原則に基づかなければならないと主張することは、これらの科学が人間の所産なのだから、すべての物事は心理学であるというような馬鹿げたものになる。だからといって、社会心理学の原則が他の社会科学に対して何の価値もないと主張することも、同様に馬鹿げている。

現在、私の主要な関心は社会心理学的見地から見た学際の問題にある。この見地からは、刺激状況の性質を規定するという基本的な目的のために、社会心理学が他の社会科学から結果と概念を借用する必要があることは明らかである。さらに、この必要性が社会心理学者の研究に対して一定の手順を課すことも明らかである。いかなる実験主義者も、刺激状況の性質を規定することなく知覚や学習の研究を始めることはないだろう。同様に、社会心理学の問題を扱ういかなる研究者も、社会的刺激状況を規定することなく、自分の研究を始めることはできないであろう。学際的な借用と交換は、研究が始まる前にまず行なうべきことである。

それでは、これまで述べた主要点を要約し、社会心理学にとっての学際的努力の適用と将来の展望に役立つようにしよう。

- (1)社会心理学と他の社会科学は、いろいろな分析水準、すなわち心理学的水準(個人を単位とする)と社会文化的水準(社会的な形態・体系を単位とする)において、同じ問題や関連する問題に取り組んでいる。
- (2)社会心理学的見地から見れば、社会文化的な分析

水準は、社会的刺激状況のパターン化した特質を規定するために要求される水準である。したがって社会心理学にとっては、他の学問からの借用は優先的な事項ではなく、必然的なものである。

(3)社会心理学と他の社会科学との関係についてのこの概念は、社会心理学の研究手法に対して一定の手順を要求する。この手順は、研究者が実験にとりかかる前に刺激状況を規定しておくために、必要なものである。

(4)最後に、社会科学との相互借入れは、社会心理学にとって、その一般化の妥当性を検証するものとしてきわめて重大になる。

妥当性についての学問横断的検証

単純に言えば、妥当性を検証するために分析水準の概念を利用する根拠は、次のようなものである。

つまり、ひとつの分析水準において得られた一般化が妥当であるならば、それは他の分析水準において得られた妥当な一般化によって否定されることはないからである。たとえば社会学者は、グループのメンバー間の相互作用が個人的特徴からは引き出せないような特質をもっていることを示す広範なデータを集めてきた。グループでの個人の行動を研究している心理学者は、各メンバーが一人でいるときとは異なる態度や行動をとることを発見するだろう。

他方、社会的相互作用を研究している心理学者が、人間の社会的パターンは基本的にはニワトリのついでに順番のようなものであると結論し、それに基づいて対人関係についての社会心理学の理論を打ち立てたと仮定してみよう。比較心理学者Schneirlaは、ニワトリと人間の社会的関係を基礎づける能力は、根底において非常に異なるものであると、指摘している(1946年)。

また社会的な体系と構造にかかわっている社会学者も、人間の役割の関係が、ついでに順番の基準としては適さないことを示す多くのデータを持っている。人間の関係は支配力だけでなく多数の次元を具体化するものであり、一面的な類推が当てはまらないことは、すぐにでも証明できる。

他の社会科学からの借用と研究順序

すでに明らかなように、学際関係の問題に対する解決策は、心理学や社会学や他の社会科学についてすべてを知っているようなスーパーマンを生み出すことによって得られるものではない。また表面的

な知識をかじることによっても得られない。

それは、ひとつの学問の他者に対する相対的位置を確定し、さらに、いつ、どのような相手から、何を必要としているかを知ることによって得られるのである。

方法については、「知覚における社会的要素の実験的研究」(M. Sherif, 1955年)の例を通して説明できよう。これらの実験は、一般的・社会的規範に対する個人の知覚の集中を実証した。実験は、実験心理学で古くから知られる視覚的刺激を利用したが、実験の概念と研究課題は、実験心理学から発展したものではない。それらは、私と文化人類学者と社会学者との接触、特に大都市に住む小グループの規範について研究していたシカゴ派の学者との接触、フランスの社会学者Emile Durkheimの著作を読むことによって組織化されたのである。

同じような意味で、15の異なる文化に属する1800人以上の被験者を使って、ある種の“代表的”な錯覚に対する感受性の文化的相違を調べたプロジェクトの報告書(Segall, Campbell, Herskovitz, 1966年)を検討することにしよう。このプロジェクトは、被験者間の文化的相違を環境の相違から求めた。同時に、社会形態学における変容の概念をも援用している。けれども、人類学者がこのプロジェクトで心理学者の技術を身につけたとか、心理学者がその過程で人類学者になったとかいうことは、きわめて疑わしい。そこで生じたのは、心理学と人類学という学問がこの研究から利益を受けたということである。

この研究の、強調されるべき意味は、錯覚に対する感受性の相違をもう一度実証したことではない。その点については、イギリスの人類学者Riversがすでに確認している。むしろ、社会文化的形態学を、ある種の錯覚に対する特異な感受性と結びつけようとしたことが強調されるべきである。換言すれば、まず初めに社会的刺激条件の相違が確立されていなかったならば、このプロジェクトは完成しなかったであろう、ということである。

社会的刺激状況の主要な特質について述べることの意義は、グループの形成とグループ間関係についてのわれわれの著作(1953, 1961, 1966年)を通じて、もっと詳しく説明できるかもしれない。一連の実験において、グループ員が共同して解決にあたらなければならないような問題状況を提示した。ここでわれわれはグループが個人の集合であるか否かの問題に直面する羽目になったので、グループの基準

を定めるために、社会学者による経験的研究が再び必要となった。

形成された2つのグループが接触しているときに、メンバー個人の態度・行動が研究された。最初の接触は、一方のグループの成功が必然的に他のグループの敗北を意味するような一連の状況において行なわれた。もちろん、グループ間およびメンバー間には激しい葛藤が生じた。この時点で、2つのグループに属するすべての個人は、生得的、生物学的傾向か、幼児期の極端な欲求不満のいずれかに分類される、不愉快な個性と偏見をはっきりと示した。被験者はきわめて正常で健康的な人々であり、幼児期に異常な剝奪を受けてはいなかった。さらに、2つのグループの協力を必要とする状況を追加することにより、このような攻撃的傾向が生得的なものでないことも確認された。少なくともこれらの傾向は変わりうるものであった。

これらの実験における研究課題と方法の規定は、社会科学の文献を数年間にわたって調査・概観して得たものである。こうした努力はなぜ実験に先立って行なわれたのか。まず第1に、グループが形成されたといえる前に、どのような基準が基本になったかを見いだすためである。第2に、グループ相互間に形成されたこのような敵意が変わりうる条件についての仮説を引きだすためである。この研究の途中で、われわれは、たとえ2〜3週間だけのグループの場合でも、グループの歴史は重要であることを学んだ。もし、この過程を知らずに研究者がグループ相互間の葛藤における個人の態度・行動を測定していたならば、彼は今まで見たこともない攻撃的で不快な人々の群れを見つけたと結論できただけだろう。逆に、葛藤の時点より前か、あとだけで観察していたならば、いつも見ているような愛想のよい人々を見いだしていただろう。

妥当性のギャップを埋めるための展望

今日、われわれは、かつてよりももっと希望にあふれている。それというのも、ますます多くの社会学者が学際的關係に関心をいだくようになっていくからである。

社会心理学および一般的な心理学の分野における、もうひとつの望ましい徴候は、「心理学的実験についての社会心理学」と呼ばれる研究運動の出現である。現在の段階では、ある学問にとつての単なる余技的なものにはならないとの希望をもって、この運

動の効果を大いに強調することができる。たしかに Stanley Milgram は、命令の遂行に影響を与えるいくつかの重要な変数について調査を行なう場合に、実験的状況の特質に関する知識を利用することができると証明したのだから(1965年)。

この、研究についての社会心理学を調査する運動が永続的な意味をもつものとするれば、他の社会的状況、たとえばいろいろな近隣関係、文化、マスメディアなどについての社会心理学を調査する場合にも、同じ論理を適用すべきである。

心理学が実験についての社会心理学から他の社会的状況についての社会心理学に移動するとすれば、それは、社会的状況をずっと研究してきた他の社会科学の方へ向わなければならないであろう。とすれば、社会心理学も、いかなる状況でも利用できる独自の技術を持たねばならない。換言すれば、現場作業と研究所作業の利点を統合するために、さらに大きな進歩が要求されるのである。われわれは研究所と現場でそれぞれ得られた結果の妥当性を確認するために、両者の間を行きつ戻りつしなければならない。メンバーの機能としての個人の態度と行動に関する、われわれの研究プログラムは、1958年以来一貫して、実験的結果と生活の現実の間のギャップに橋をかけることを焦点としてきた。この研究の開始当初から、われわれは社会的刺激条件を規定する問題に直面しなければならなかった。われわれは、人間の近隣関係全体についての形態学的・文化的指標を開発しようと努めている Shevly や Bell のような社会学者に援助を仰いだ。また、他の社会学者からも、一般的な価値や規範を規定するための調査技術を借用した。さらに、社会学者からグループとは何であるかについての概念も借用した。このような多種多様な方法を通して、研究所と現場の研究の間のギャップに橋をかけようとする努力は、学問のより密接な交流を導くことであろう。

最後に、将来に関するもうひとつの展望の導きの糸として、政治学者 Sidney Verba の著作「小グループと政治的行動」(1961年)から、一部分を引用してみよう。「抽象的モデルは確かに魅力あるものだが、それが現実と何らかの関連を持たない限り、社会的分析に対する価値は、ごく限られたものになるであろう。研究所での研究が、ただの研究所の人々ではなく、「現実」の人々の行動を伝えるものならば、研究所と社会体系の間のギャップには、必ずや橋がかけられるであろう」(p. 246)

実験主義者は研究対象として“意味のある社会問題”を選択すべきであり、そのための最善の方法は現場の研究で得られた仮説を試すことである、というのが Verba の主張である。これはわれわれの見解と完全に一致する。実際、社会心理学にとって、学際的調整に対する最も明るい展望は、社会学者との交流を経て、自分の選択した問題が生活の現実において意味あるものにますます近づけるのではないか、ということである。そして、その利益は、われわれが考えているよりもはるかに大きいのである。なぜなら、他の学問との交流は、研究構想に見通しを与え、実り多い仮説の基礎をもたらすからである。

学際的企画での

“すべきこと”と“すべきでないこと”

ここでの“企画”という言葉は、交通事故、少年犯罪など緊急を要する社会問題に取り組むための学際的企画と、社会科学間の交流をより前進させる試みの双方に適用される。これらの企画の数は現在増加しつつあり、今後もますます増えてゆくだろう。

ただひとつのソースに基づく説明や措置は、失敗するか、あるいは不十分であるということによく知られている。また、複数学問や複数機関の企画でさえも、現実的な解決策や有効な適用法をみいだせない場合のあったことも、認めざるをえない。しかし、だからといって、学際的協力の方位設定が時期尚早であるとはいえない。

それ故、われわれと他の人々との学問横断的成果に基づき、注意を要するいくつかの主な“すべきこと”と“すべきでないこと”を要約して述べておくべきであろう。それは、妥当な学際的企画が、どのようなもの“であり”、“でない”か、また何を“すべきであり”、“すべきでない”かという表現で示されることになろう。

(1)本質的にいって、学際的的努力とは、専門研究者、政策決定者、行政官などが物理的に接近することではない。また、会議やシンポジウムにおいて、互いに関係のない一片の情報などを交すことでもない。さまざまな学問に属する人々が、自分の持つ前提にしがみついている限り、彼らはこうした学際的企画において、互いに話し合うというよりも、互いに話しかけるだけになるであろう。

以上のことは、妥当な学際的的努力が単なる並列の問題ではなく、また単なる人々の物理的集合でもないことを示している。

(2)学際的企画についての抽象的な定義から出発すべきではない。いろいろな学問流派が自分自身の定義を主張しあうことになろう。たとえば、社会科学は、その主要な分野においてさえ、一定の語法を持ってはいない。つまり、いかなる心理学、社会学の流派も、“心理学的見地から”とか“社会学的見地から”といった形では、いまだに正当には語りえない状態にあるのである。

(3)一般に正しいとされる基礎モデルの適切さを、個々の立場で批判的に検討すべきである。主張と反対主張の渦巻く中で、もし十分に掘り下げるならば、他の基礎モデルを見いだすことも可能であろう。

(4)問題と共に出発すべきである。共に出発すべき問題の公式化に十分集中するならば、適切な研究構想や妥当な仮説をひきだすことが可能となろう。また、そうすれば、公式化した問題が、自分の関わっている特定の現状の形状(構造)と作用(機能)の本質を反映することになろう。この点については、アインシュタインの結論を思いだすべきである。「一つの問題の公式化はしばしば解決策より重要である」

(5)学問的優越感によって自分の視野を狭めるべきではない。矛盾した方向の調整に貢献できるのは、単一学問の優越感による束縛から自由になれる人だけである。

(6)方法と技術の組み合わせを利用すべきである。それらは互いに排他的なものではない。もちろん、方法と技術の選択の問題は、対象とする問題の特質と無関係ではない。

学問、方法を横断的に確認することは、妥当な一般化を得るための確実な進路である。このような進路をたどるならば、個々の学問の中においても、統一性がもたらされることになろう。そして、この統一性の維持が、学問を安定させ、深化させるのである。なぜなら、学問、方法の横断的確認によって、それぞれが、その立つべき場所と、さらには掘り進むべき場所に関する相対的位置を、確かめ得るからである。